

## 書評

高倉浩樹・佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』（国立民族学博物館調査報告78）、国立民族学博物館、2008年、551頁。

**Book Review: Takakura, H. and S. Sasaki, *Perspectives of Postsocialist Anthropology through Japanese Eyes*, Osaka: National Museum of Ethnology, 2008.**

帯谷 知可 (Chika OBIYA)\*

### 1. はじめに

本書は、筆頭編者である高倉浩樹（以下敬称略）を代表とする国立民族学博物館の共同研究「ポスト社会主義における民族学的知識の位相と効用—制度としての人類学の多元的解明にむけて」（2004～2006年度）の成果として編まれたものである。目次は次の通りである（論文の副題は省略）。

「序 ポスト社会主義人類学の射程と役割」高倉浩樹

第I編 制度としてのソビエト民族学

第1部 民族学理論の位相と歴史主義の可能性

「ソビエト民族学の理論と西側人類学との対話」佐々木史郎

「ロシア民族学に於けるエトノス理論の攻防」渡邊日日

第2部 隣接分野との関係、周辺諸国における影響

「旧ソヴィエト考古学における民族起源論の系譜」加藤博文

「原始的なもの—人間性の起源と共産制社会の探求」折茂克哉

「スロヴァキアにおける文化人類学と社会主義」神原ゆうこ

「学術理論の思想的分析から地域をよみとく」仲津由希子

第II編 ポスト社会主義民族誌の可能性

第3部 エスニシティとナショナリズムにおける民族の想像

「ロシア連邦におけるロシア人サブグループをめぐる昨今の状況」伊賀上菜穂

「英雄叙事詩マナスとネイション形成再考」吉田世津子

---

\* 京都大学地域研究統合情報センター (Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)

「カラカルパクの知識人ダウカラエフについて」坂井弘紀

#### 第4部 ロシア文化の伝統とメディア

「現代ロシアにおける呪術ブームの生成」藤原潤子

「ソ連におけるロシアの民族器楽」柚木かおり

#### 第5部 宗教復興と記憶の位相

「2つの原理と7つの核」菊田悠

「ポスト・ソビエト時代における大規模な供養アスの展開」藤本透子

「社会主義と宗教の記憶」滝澤克彦

#### 第6部 市場化における生産と仕事をめぐる位相

「持参財を飾る刺繍、販売する刺繍」今堀恵美

「モンゴル牧民社会における郊外化現象」尾崎孝宏

「ポスト社会主義下における牧畜生産の市場経済適応過程とその文化的位相」高倉浩樹

「あとがき」佐々木史郎

この目次を一瞥してもわかる通り、執筆者は合計で17名、総ページ数551ページという共同研究の報告書としては例外的といってもよい部類に入るであろう肉厚さである。それもさることながら、内容の骨太さにおいてひとときわ光る論文集となっている。

その「骨太さ」の所以は、冒頭にあげたこの共同研究の前段階とも位置づけられる科研費プロジェクト（基盤研究C「ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究」、2001～2002年度、代表者：佐々木史郎）以来、高倉、渡邊日日、佐々木史郎のイニシアティブによって、若手・中堅の人類学研究者らを幅広く巻き込みながら野心的に追求されてきた「ポスト社会主義人類学」という新しい研究領域の進化と深化をふまえて、その視座と方法論とがより明確な形で言語化され、執筆者の間に共有されて、本書の全体を貫いているからである。執筆者の全員が必ずしも人類学を専門とするわけではないが、編者の提示する構想が全体をひとつの流れとしてまとめることに成功しているといえる。共同研究の成果報告書という性格ではあるが、共同研究の題目名よりもかなり幅を広げて設定されている本書のタイトルが示すそのままに、本書は人類学における固有の研究領域としての「ポスト社会主義人類学」の存在、その有用性と民族誌記述の具体例とを世に問うたものであり、またその入門編として読むことも可能であろう。なお、入門編としては、上述のプロジェクト「ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究」の同タイトルの研究成果報告書（国立民族学博物館民族学研究開発センター、2003年）を合わせて読むべきであろう。こちらには方法論共有の試みとして「ポスト社会主義圏農村を対象とした民族誌学的調査項目リスト」も掲載されている。

## 2. ポスト社会主義人類学

それでは、ここで提示されるポスト社会主義人類学とはいかなるものなのか。高倉による「序」での議論を筆者なりにまとめると次のようになる。なお、この「序」は、人類学という学術分野における貢献を強く意識してポスト社会主義人類学の構想を提示しつつ、本書に収録された、理論の分野での論文と、諸地域における民族誌の記述を目的とする論文とを説得力をもって束ねる役割を果たしている。

ポスト社会主義人類学は、1991年のソ連解体によって、社会主義時代の終焉を迎えた旧ソ連地域（東欧・モンゴルなどソ連に隣接するソ連型社会主義を歴史的に経験した地域も含む）を人類学的な研究の対象とする場合に、「民族誌記述および人類学的考察をすすめる上で共有可能な、一定の視座と方法論が存在し、それに基づく研究領域が現存する、という確信的な仮説」（傍点ママ、2ページ）として提示される。ここでいう「研究領域」とは、旧ソ連圏を対象とする研究をあたかも一括りにするような独自のパラダイム構築をめざすものというよりは、研究プログラムのような過渡的な性格のものであることが注意深く強調されている。そして、それが「現存する」という「確信」は、ソ連解体後の1990年代から旧ソ連圏でフィールド調査を行うことになった人類学研究者たちがそれぞれのフィールドで眼前の現実と格闘しながら、従来の欧米の人類学の概念や理論がそのままでは適用できないことに突き当たった末に、それぞれの形で獲得し、後の議論の中で徐々に形を成してきたものである。

ポスト社会主義人類学の具体的な視座・方法論として重視されるのは、(1)分析枠組みとして、伝統と近代の二元論に立脚するのではなく、「伝統・社会主義・現在」という3つの歴史的位相を想定し、その相関性を同時代的に分析すること、(2)人々の日常生活に「社会主義」という歴史的経験が内在化している（あとかきの佐々木の表現によれば「練りこまれ」ている、538ページ）ことを認識すること、換言すれば社会文化的背景として社会主義の時代＝近現代史を深く把握すること、(3)社会主義を文化的他者としてとらえた上で「他者としての社会主義」の脱構築をめざすこと、(4)制度としてのソヴィエト民族学の諸相の解明と再評価、の4点であると整理できるだろう。

(3)および(4)の点は、まとめて「ソヴィエト民族学の再評価を通じて、他者としての社会主義を脱構築する民族誌記述の可能性をさぐる」（14ページ）アプローチと表現されるが、ソ連における知の体系としての民族学の展開の歴史と諸理論を内在的にとらえ直そうとする姿勢（この点では渡邊が精力的に議論をリードしている）は欧米においても進展の見られたポスト社会主義地域を対象とする民族誌記述の試みには見られなかったものであり、ここで提示されるポスト社会主義人類学を日本発の独創的な試みと位置づけることを可能にしている着眼点である。

さらに、(2)(3)に関連して強調される点として、ポスト社会主義人類学の形成過程においても、今後の進展においても、人類学と地域研究、特に近現代史をベースとする旧ソ連地域研究との協働が重視されており、学際協力の展望が示されている。

こうしたポスト社会主義人類学の視座・方法論に基づいた、「ソ連現代史に由来する理念・制度を含みながら現存する社会空間」(11 ページ)の民族誌記述の具体的な研究課題として、大きく分けて、エスニシティと伝統主義をめぐる問題(ナショナリズム、メディアなど)と、資本主義化における生き方と心の問題(宗教、記憶、生業・仕事、ジェンダーなど)が本書で扱われている。収録されている個々の民族誌については、「序」において的確に紹介され、ポスト社会主義人類学におけるそれぞれの位置づけも行われているので、ここであらためて概観することはしないが、こうした民族誌記述の作業が、従来の人類学において一般的にはすでに定着していると見なされている諸概念の見直しを促し、新たな研究領域の開拓をも可能にするだろうとの見通しが示されるのである。

### 3. 「ポスト社会主義人類学」という構想に対して

以下、本書に対する若干のコメントを述べてみたい。まず、ポスト社会主義人類学という構想そのものに対してである。

ソ連解体から数年を経た頃、ロシアとソ連をよく知る筆者のある知人(日本人)が、筆者の滞在するウズベキスタンを訪れて、「ここにはソ連が残っているなぁ」と感慨深げにつぶやいたことがある。人類学者でなくとも、文献調査や留学その他の目的のために旧ソ連地域に滞在した経験のある者であれば、何か「ソ連的なもの」が日常の社会空間の中に確かに存在しているということに多分に共感するのではないかと思う。そのような、どこか漠然とした「ソ連的なもの」、近代的といえれば近代的だが決して欧米的でない、私たちにとってなじみのない、モノや制度や、場合によっては人々のメンタリティ、それらを人類学的な思考と手法によって分析の対象とし、解明しようとしてきたポスト社会主義人類学の推進者たちの努力に対して、率直に敬意を表したいと思う。実際に旧ソ連圏でフィールドワークを行った人類学者の裾野の広がり背景として、「ソ連的なもの」に対する共通認識を形成し、この構想が形を成すにあたっては、時宜を得て、そして強いイニシアティブのもとに共同研究という形態でインテンシヴな議論の場をもったことがきわめて有効であったものと推察する。また、人類学と地域研究との邂逅は本書で強調される点のひとつだが、中央アジア近現代史・地域研究に身を置き、ウズベキスタンに滞在経験を持つ筆者にとって、例えば「極めてロシア的な文化伝統や歴史要素が刻印された社会空間が、ロシア人にとっても民族的少数者にとっても、民族誌的に透明な「近代」=ソ連的なものとして内在化されている」(8 ページ)という高倉の指摘は、シベリアの例と比べればロ

シア人よりむしろウズベク人のほうが圧倒的多数を占めるウズベキスタンの例においてさえ、少なくとも都市部を念頭に置く限り、地域研究者としての筆者の現場感覚にしっかりと馴染むものであり、筆者は本書から多くの示唆を得た。

さて、ポスト社会主義人類学のこれからに対する関心から、筆者には次のような疑問がある。第一に、ポスト社会主義人類学という構想に対して、もちろん人類学の分野からさまざまな反応があることが予想されるが、国内において同じ人類学の分野で同じく「現存する(した)社会主義」を対象とする諸研究とこのポスト社会主義人類学がどのように差異化されるのか、あるいはどのような点で接点を持ちうるのかという点である。例えば、筆者の知る限りでは、小長谷有紀(国立民族学博物館)が社会主義に関する記憶とナラティブ、社会主義における近代化といったテーマで近年プロジェクトを進めている。小長谷のプロジェクトは基本的にソ連型社会主義に限定されないもので、そこでは社会主義的=ソ連的という図式は想定されないが、一方で小長谷自身の専門でもあるモンゴルをはじめとして、ポスト社会主義人類学との対象地域の重なりは大きい。私見では、両者ともに当該社会の民族誌記述のための背景をおさえるためという以上の意味で、当該地域の近現代史に着目すべしとしている立場も共通している。高倉も「序」の注8で小長谷の仕事に短く言及してはいるが、ポスト社会主義人類学が人類学における貢献ということを強く念頭に置いていることに鑑みれば、両者の間に建設的な対話がなされるであろうことを期待したくなる。

第二に、過渡的な研究プログラムとして提示されるポスト社会主義人類学の「落としどころ」ないし「着地点」はどこに設定されているのかという点である。もっとも現段階ではそれは必ずしも明確ではないのかもしれないが、「序」において、旧ソ連圏以外の民族誌報告との比較や、(例えばイスラームをテーマとして)別の地域的枠組みにおける比較研究の展望、ポストコロニアル研究やグローバリゼーション研究、ジェンダー研究、開発経済学などとの接合の可能性、また人類学史において新たな局面を開く可能性などが指摘されてはいるものの、本書がポスト社会主義人類学のいわば中間的成果を提示したものであると理解するならば、何をもってその過渡期的な役割を完結したとみなし、次の段階へ進む、ないしは別の形態へと転換する指標とするのかについての見通しが提示されてもよかったのではないだろうか。

#### 4. 中央アジア近現代史・地域研究の立場から

次に、旧ソ連中央アジアの近現代史・地域研究の立場からのコメントを述べたい。

ソ連解体以降、現代中央アジアを研究対象とする日本人研究者の数は格段に多いとは言えないが、徐々に増えており、中央アジア研究または中央ユーラシア研究という枠組みで

のコミュニティにおいて、分野を問わずに研究交流が行われてきた。その中で、人類学者たちはフィールドワークに支えられた下からの視線、人々の側からの視線の研究によってソ連解体後のそれぞれの社会の姿を提示してきた。本書に掲載された論文のうち、中央アジアを対象としているのは、吉田世津子（クルグズスタン）、坂井弘紀（カラカルパクススタン/ウズベキスタン）、菊田悠（ウズベキスタン）、藤本透子（カザフスタン）、今堀恵美（ウズベキスタン）の5論文であり（坂井以外は人類学）、ポスト社会主義人類学においても一定の存在感を示すにいたっている。すべての論文について触れたいところだが、紙幅の都合から、ここでは特に、フィールドの事例を出発点に大きな理論的枠組みを提示した菊田論文に言及したい。

この論文は、中央アジアのイスラーム信仰の実態について、2つの原理と7つの核という概念を設定して説明を試みており、まったく新しい見方を提示するたいへん興味深いものである。筆者も含め、基本的に従来の「公式のイスラーム」対「非公式のイスラーム」という図式から脱却せずにとどまっていた中央アジア近現代史・地域研究にとって、国際的にも一石を投じる可能性のある議論である。菊田自身も述べていることだが、この見方をもって、調査地のみならずウズベキスタン全体の（あるいはウズベク人の、またはタジク人の）、ひいては中央アジアのイスラームを語るができるのかどうか、今後の実証が待たれるところである。さらに、提示された構図の妥当性がイスラーム研究の側からも史料等によって検証される必要があるだろう。民衆の中におけるイスラームのあり方は、イスラームに対して過剰反応を示しがちなウズベキスタンの現政権のもとでは調査に制約の大きいテーマではないかと推察するが、今後の展開が注目される。

次に、本書、特にソヴィエト民族学への着目という観点から、筆者がおおいに啓発された点について述べてみたい。中央アジア近現代史・地域研究にとって、「民族」をめぐる諸問題はきわめて「ソ連的」なものである。筆者自身の関心から言えば、ソヴィエト的「民族」の認定をも含め1920年代半ばの中央アジア民族・共和国境界画定のプロセス、ソ連史学のもとでの民族史・民族共和国史の記述方法、独立後のナショナリズムと歴史の見直しといったテーマが浮かぶ。筆者はかつて、一見ソ連史学と決別し新たな理念のもとで編纂されているかに見える独立後のウズベキスタンの正史が、実はソ連時代の民族史・共和国史とはほぼ同じ理念に基づいて書かれており、民族起源論に立脚したソ連流の歴史叙述の理念と手法がウズベキスタンの歴史家たちの内部に深く埋め込まれているという主旨の文章を書いたことがある。このように、ソヴィエト的な知の体系が中央アジアに浸透した「結果」を見て取ることは可能なのだが、渡邊論文を一読して、それではそれはどのようなプロセスを経て中央アジアに定着したのか、強制的に「上から」移植されただけではなく、モスクワとウズベキスタンの間で、そしてウズベキスタン内部でも、ある種の知的

攻防を経たのではないか、それを突き詰めるべきではないかということに思い至った。また、ソ連の民族共和国では学問分野・研究所の配置も中央とは異なっていることがしばしばあり、例えば筆者の知る限り、ウズベキスタンでは独立の民族学研究所は設置されたことがなく、民族学の中心は歴史学研究所の民族誌部門に置かれ、いわば民族学は歴史学に従属していた（現在もそうである）といえる。このような状況下では、ソヴィエト的な知の体系はモスクワやレニングラード（現サンクトペテルブルグ）におけるのとは異なった経路で展開した可能性はないのだろうか。中央アジアではプロムレイは誰がどのように読んだのだろうか。渡邊は人類学の立場からソヴィエト学術史を民族誌的に解剖するという深遠な構想を抱いているわけだが、ソヴィエト民族学の中央アジアにおける展開を追跡することは中央アジア近現代史・地域研究にとっても中央アジアのソ連時代を解明し、現代を理解する上で大きな意味をもつものと思われる。

## 5. むすび

今後、旧ソ連圏を対象として、人類学的な研究・調査を行おうと志す者にとっては、本書は必須文献のひとつとなると言っても過言ではないだろう。ポスト社会主義人類学のさらなる進化・深化と、本書の続編をぜひ期待したい。そして、この地域を対象とする研究において、人類学研究者と近現代史・地域研究者相互の間での切磋琢磨の行方にも期待したい。

なお、本書の内容の豊かさに比すればはなはだ瑣末なことではあるが、全体を通してロシア人等の人名のカタカナ表記の方式および原綴のローマナイズ方式は統一したほうが読者には親切であったかと思う。